神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

意志表現をめぐる日中対照研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Son, Jyukyo メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1846

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

博士論文審査の要旨

本論文は、「対象動作に対する話し手のそれを実現させようとする主観的態度」を表すとされる意志表現の総合的研究であり、特定の論点に絞り込むのではなく、意志表現に関する様々な問題を幅広く考察している。

より具体的には、1つは、文のレベルと談話のレベルの両面に分析を及ぼすということであり、もう1つは、日本語と中国語を比較対照することにより、単一の言語のみを見ていては得られにくい観点を見出そうと努めているということである。前者の、意志表現をめぐる文レベルの分析・談話レベルの分析が論の展開の言わば“縦軸”をなし、後者の、日本語と中国語の対照研究が言わば“横軸”をなすという重層的な構成になっているところに本論文の特色が認められる。

本論文はまた、観察を表現の形態面・意味面・語用面（談話語用論の面）に広く行き渡らせている。対照研究を行うことにより、これら形態面・意味面・語用面に多くの新たな論点を見出そうとしている点も注目に値するところである。

以上により、本論文は文化交流専攻の博士論文として十分な成果を挙げたものと評価される。

論文審査結果

検討事項を文レベルの問題と談話レベルの問題に分かち、それら2つを共に考察の対象に据えるという方針のもと、本論文は大きく2つの部で構成されている。すなわち、第2章で本論文のテーマに関わる先行研究が整理された後、本論の前半を構成する第3章と第4章において文レベルの問題が扱われ、後半を構成する第5章と第6章において談話レベルの問題が扱われている。意志表現を文内では発話の領域に位置づけ、談話のなかではその発話機能を考察することで、文と談話が交差する領域に切り込んでいったと言うことができる。

意志表現の分析に対する本論文の著者（以下、「著者」）のアプローチの基本は、表現の意味をベースに置いてそれが表現の形（形式）とどのように結びつくかを考察していこうというものである。そこで、前半の文レベルにおける分析では、まず文の意味構造に意志表現がどう位置づけられるかという問題が取り上げられる。これが第3章のテーマである意志のモダリティの文論への位置づけの問題である。それに続いて、意志のモダリティを表す諸形式（日本語の「スル」・「シヨウ」・「シタイ」・「スルツモリダ」、中国語の動詞無標形式・「要」・「想」）がどのような具体的な意味と結びつくかが、意志以

外の意味を表す場合も含め詳しく吟味されている。そこでは、関係する諸形式が表す意味の多義性のあり方が問われることになる。これが第 4 章のテーマである。

後半の談話レベルの分析においては、意志表現の意味が発話環境（聞き手を含む）との関わりによってどのように発現するかが考究されている。まず第 5 章では、意志を表す諸形式が所与の発話環境のなかでどのような発話の意味を表すかという点が論じられる。その結果を受けて、続く第 6 章では、対話における対人配慮（聞き手配慮）が意志表現の形式の選択にどのような関わりを持つかが検討される。談話レベルの分析―とりわけ、第 6 章の分析―においては、語用論の観点からの考察が重要な役割を果たすことになる。そうした議論を通じて、文法論から語用論に及ぶ本論文の射程の広さが示されていく。

本論文では、豊かな研究の蓄積を持つ日本語をまず考察し、その考察結果を中国語と照らし合わせてみるというやり方が採られている。この方法には日本語の研究成果が中国語の分析に偏りを生じさせる可能性があるが、著者はその点を十分自覚し、日本語と中国語の類型的な違いを把握することに意を注いでいる。本論文の貢献の大きな部分は日本語と中国語の対照によりもたらされる成果である。その成果のなかで特に注目される点を以下に記す。

第一に、意志表現の形（形式）と意味についてであるが、そのなかでまず形の問題に関しては、意志を表す諸形式のなかで動詞の無標形について詳しく考察している点が目を惹く。同じ無標形式と言っても、日本語のスルはシタとの対立のなかで非現実性（未実現性）の意味を帯びるが、中国語の動詞無標形は語彙的な概念を表すにとどまり、時間性の意味を帯びないという指摘がなされている。同じ無標形式であっても、活用（屈折）を持つ日本語と活用（屈折）を持たない中国語とのあいだにこうした差異があることは、動詞に関わる種々の問題を考察するうえで重要な意味を持つ。

一方、意味の問題については、意志を表す諸形式に関する詳細な意味分析を行うなかで、「情意系 vs. 認識系」という対立の重要性を明確にしたことが評価される。日本語は情意と認識の意味が表現形式において分かれる（シヨウ・シタイ vs.スルツモリダ）が、中国語にはそのような分化は認めがたいということが示されている。

第二に、談話レベルの分析については聞き手の存在の関与という問題が注目される。表現形式の選択に対話（聞き手存在発話）と独話（聞き手不在発話）の違いが関与するかどうかという点について、著者は日本語のほうが聞き手存在発話と聞き手不在発話を区別する傾向が強いと見る。すなわち、著者によれば、動詞の無標形式について日本語ではその使用が聞き手存在発話に偏るが、中国語にはそのような偏りが見られない、また中国語は「要」・「想」についても聞き手存在発話への偏りは見出されない、ということである。

この点に関連して、意志表現の使用にあたって「聞き手領域」を特別扱いするか否かの違いが興味深い論点を提供する。聞き手存在発話の場合、日本語では聞き手領域を特

別扱いする傾向が強いが、中国語ではそのような傾向は弱いというのが著者の主張である。聞き手配慮の傾向が強い日本語とそれが弱い中国語という違いは、聞き手の存在の関与というファクターが日本語においては重要な意味を持つことを意味する。

最後に、今後の研究の課題に少し触れておきたい。１つは、文法と語用論の関係を明らかにしていくために、所与の意味が文脈に依存する語用論的な意味であるか否かの具体的な判定基準を見つけ出していくことが求められる。そしてもう１つ、日本語と中国語の相違を他言語にも適用可能な、より一般的な言語類型の問題に高めていくことが重要である。これらはいずれも高い目標ではあるが、語用論や言語類型論の発展に資する方途となろう。

最終試験結果【試験実施 2014 年 1 月 29 日】

最終試験には主査を含む 4 名の審査委員全員が出席し、著者による論文の概要説明に続いて、著者とのあいだで質疑応答を行った。審査委員からは様々な角度から質問・コメントが寄せられたが、著者はこれらの質問・コメントに対して真摯に回答した。これらの質疑応答を通じて著者の意図がより明確になり、また今後取り組むべき課題が示されたことは幸いであった。

質疑応答の様子から、著者が十分な準備をして最終試験に臨んだことが窺えた。著者が終始真摯かつ謙虚な態度で本試験に対応したことが印象的であった。最終試験においても本論文が博士論文として十分な成果を挙げていることが審査委員によって確認された。